

第二章 明治三十一年～四十五年八月

(一八九八～一九一二)

ユンケルと共に

明治三十一年、日本音楽会に代って結成された明治音楽会は広く庶民層を対象に洋楽普及を目ざして音楽運動を開始した。その運動を背景に東京音楽学校も同年秋季から定期演奏会をスタートした。当初は春・秋の年二回、幅広い愛好家に支持されて今日に至っている。第一回目の十二月四日(明治三十一年)は日曜日、午後一時半からのプログラムは日本語と英語で印刷され、当時研究生であった瀧廉太郎のピアノ独奏、助教授頼母木コマと橘絲重のヴァイオリンとピアノの重奏、遠山甲子、今井新太郎および生徒による箏曲、ケーベル博士のピアノ独奏、それに合唱が花を添え華やかな構成であった。翌三十二年東京音楽学校はアウグスト・ユンケルを音楽全般の指導者に迎え(『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一卷五三二頁参照)、技術面に非常な磨きがかけられた。特に管弦楽は、金管部門を軍楽隊に負うものの、ユンケルのきびしい本格的な指導によってめきめきと力をつけ、その成果は定期演奏会におけるフルオーケストラの管弦楽曲演奏によって披露された。

三十五年頃からは管弦楽の全曲演奏が行われるようになった。ユンケル指導のもとに制覇したそれらの曲は次のようである。

ビゼー〈カルメン組曲〉(三十三年)、シューベルト〈未完成〉(三十五年)、モーツアルト〈シンフォニー・コンチェルトンテ〉(三十六年)、ビゼー〈アルルの女〉(三十七年)、メンデルスゾーン〈ピアノ協奏曲〉(三十八年)、ケルビーニ〈レクイエム〉(三十八年)、モーツアルト〈ピアノ協奏曲〉(三十八年)、ルービンシュタイン〈ピアノ協奏曲〉(三十

九年)、バッハ「クリスマスオラトリオ」より〈シンフォニア〉(四十年)、モーツアルト〈セレナーデ〉(四十年)、ドヴォルザーク〈スラヴ舞曲〉(四十年)、ベートーヴェン〈ピアノ協奏曲第三番〉(四十一年)、メンデルスゾーン〈カプリチオ・プリリヤンテ〉(四十二年)、ベートーヴェン〈ピアノ協奏曲第五番〉(四十三年)、メンデルスゾーン〈シンフォニー第三番〉(四十三年)、ブラームス〈ドイツレクイエム〉(四十三年)、グリーク〈ペールギェント組曲〉(四十四年)など。

また、唱歌として原詞に全く関係のない歌詞を付けて演奏していた従来の習慣が訳詞に改まる傾向が見られるようになったのも、成長した東京音楽学校の時代的現象であろう。アルカデルトの〈偶成〉(アヴェ・マリア)、ケルビーニの〈橘の薫〉(レクイエム)、シューマンの〈薩摩瀉〉(流浪の民へ、樺の森の葉がくれに)などが主な例である。さらに明治三十八年からは定期演奏会の英文を伴った詳細な曲目解説が作成され、欧米並の水準に近い様相を呈するようになった。

明治四十年十二月に雇い入れたヴェルクマイスターが就任早々の定期演奏会(十二月十五日)で披露したチェロ独奏(リンドネルヘチェロ協奏曲)も、ユンケル時代の大きな話題の一つであった。

次の統計資料は、三十一年から大正三年までの日本全国の演奏会および東京音楽学校演奏会の回数を表したものである。明治時代後半の音楽会を展望する資料の一助として提供したいと思う。

村上一郎「統計の結果」を引用。これは『音楽界』一五五号、大正三年九月号(三四～三七頁)と一五六号、同年十月号(四三～四四頁)に掲載されたものである。

統計の結果 [一五五号]

村上一郎

統計といふことは事實の論断には、最も重要なもので、眞に具

部 中 州 本				信 甲			羽 奥			東 關																					
富	石	福	岐	滋	三	愛	靜	新	長	山	山	秋	青	岩	宮	福	栃	群	茨	千	埼	神	東								
川	井	阜	賀	重	知	岡	瀧	野	梨	形	田	森	手	城	島	木	馬	城	葉	玉	川	奈	京								
一				一	一	一	一	三		一	二			二		一		二				三	年	四	四	治	明				
二	一				一		三	一	三					二		一	一	一	一		一	七	年	五	四		同				
一				一	一		一	四					四			一						二	年	二		正	大				
一					一			三	一				一	一		二	一			一		九	年	三			同				
五	一	〇	〇	二	四	二	五	二	三	一	一	二	〇	五	五	〇	五	二	三	一	一	三	查	計		合					
五	二		一	三	五	八	三	六	〇	四	三	五		兜	七		三	四	三	五	七	二	四		歌	唱					
				三		一	二		五	一		二			三			二	一		二	〇	奏	合	ノ	ア	ピ				
三				六	一	三	二	三	五	二		二		二	二		三	二	六		二	〇	奏	獨	ノ	ア	ピ				
七					二		五		七					六		四	三	六	三				奏	合	ン	ガ	ル	オ			
四				八	四	三	二		七		一	三		二	七		二	七		一	二	三	奏	獨	ン	ガ	ル	オ			
五	二			三	六		二		七			三		九	一					一	六	六	奏	合	ン	リ	オ	イ	ア	ヴ	
二	一				六	三	九	二	三	二				九	三		四	三	八			九	奏	獨	ン	リ	オ	イ	ア	ヴ	
二					四		一		六			一		三	二		四	一		一	四	六	樂		絃		管				
								二	一					二			一	一			二	五	奏	獨	ロ	セ					
一					二			四	一								一					九	、ンリオイアヴ、ノアピ ロセ								
二					三			四	九					一							一	五	ンリオイアヴ、ノアピ リオイアヴ、ンガル オン								
					三			二						二									ロセ、ンリオイアヴ								
																							ンガルオ、ノアピ 、ノアピ、ンリオイアヴ ンガルオ								
																							、ノアピ、ンリド ンマ ンリオイアヴ								
																							ニロセ、ノアピ								
																							ンリド ンマ								
																							ラオ ビ								
			一						一														ン一 ボン ロト								
																							ト一 ユリ フ								
								一															ノアピ、トネッ ルコ リラク、ト一 ユリ フ								
																							トネッ オ アピ、トネッ オリ ラク ノ								
																							一樂絃、ノア ピ								
七	四			二	二		四		四	三											一	四	七	八	尺	、	箏				
	三								二													二	三	五			唄	長			
	四								二												八	二	一	四	三	六	一	和	調	洋	和

體的説明は、是に依る外に手段がないのであるが、兎角一般から受けない。近頃縣下の教育雜誌に寄稿する必要から、種々取調べた所があつたので、其中参考になりそうなものを、二三貴誌に寄稿する、精細に觀察すると、中々に興味がある。

第一 音樂の度數及び其の演奏樂の種類〔六二―六三頁〕

附言

最近四年間の統計であるから、この開會度數を以て、其の地の音樂の盛否を、論斷批定する譯には行かないが、矢張大勢は動かすべからざるものであらう。尤も計數は必しも精確ではない。調査し得らるゝ丈にしてあることは勿論である。

一、何と言つても音樂は、東京の一人舞臺である。然かも東京音樂學校の分と、日比谷奏樂堂の軍樂は、加へてないのである。而して實質の優つて居る回數の多いのは、物質文明の都會たる大阪が、是に續く、悔ることが出来ない。内容はズツト劣るが、教育旺盛の地、殊に伊澤先生を出した長野縣は、回數は是と匹敵するのは、敬服すべきものである。其の他は到底ものにならない、殊に三府と言はれる京都府の、其少ないのは感服せぬ。然も内容が著しく劣つて居る。九州、四國、奥羽の氣勢上らぬのは、依然として居るが、本州中部は割合に寂寞の感がある。福岡は矢張紳博士の活動が、少しくは其の威を振ふて居るのも面白い。福島、青森、岐阜、福井、奈良、山口、高知、佐賀、長崎の九縣に至つては、僅一回も催しがないのは、如何な譯であらうか。勿論調査漏と思ふが、其にしても、早くより日本の文明を輸入した長崎、奈

良の古都を控へて、且女子高師の所在地たる奈良は、是非とも今少しく否大に活動して貰ひたい。

二、演奏樂の種類を見ると、一層切實に其の地の進否が、瞭然たるように思はれる。管絃樂及び絃樂合奏は、東京、大阪、長野、兵庫で、少しも演奏のない處が、其の多分を占めて居る。セロの獨奏は東京のみで、他に十一ヶ處を算する頗僅少で、是は甚だ先途が遠い。ピアノのソロも合奏もない、千葉、山形、石川の三縣は、樂器が乏しいのであらう、實に御氣の毒である。オルガン獨奏では、大抵な縣が多數である、是を見るとまだまだ吾が樂界の進歩は、遅々たるものである。箏と尺八は何と言つても、我が邦の音樂の、主要部となつて居る。和洋調和樂といふ假名の下にある演奏、即ちヴァイオリンやピアノやオルガンで、俗曲（尊敬して言へば邦樂）を演奏することは、現時音樂會の生命となつて居る。東京は邦樂のみの演奏が多いから、この統計には少いが、兎に角是で始めて、西洋樂も聴きに來るといふ現狀である。屋内音樂會に軍樂の演奏は、聊鷄を割くに牛刀を以てする嫌がある。琵琶や横笛やガイセン琴や木琴の入つて居るのは、何たる心細いことであるか、又ハーモニカなどは、眞面目の沙汰ではあるまいと言ふ人がある。

統計の結果（一）〔一五六号〕

村上 一郎

第二 東京音樂學校同上〔六五頁〕

